

### 上智大学中世思想研究所

#### 1 沿革と組織

今世紀50年代における中世研究の飛躍的向上にともなって、欧米また日本において中世思想の研究を促進する目的の下で現代まで指導的役割を果たすいくつかの学会・研究所が設立された。たとえばケルンの「中世研究者会議」(1956年)、「国際中世哲学会」(1958年)、また日本においては中世哲学会(1952年)などである。上智大学ではそのカトリックの建学精神に従って、すでにそれ以前の時代から中世哲学の研究が吉満義彦教授などによって開始され、また終戦直後から始まった「トマス会」によって育まれてきた。日本の中世哲学会創立後には江藤太郎教授とJ. ジーメス教授のイニシアティブで、また他大学の中世哲学会の指導的会員・教授の積極的な協力を通して、1955年に上智大学文学部内に「中世哲学研究室」が開設されることになった。その設立意図は上智大学のみならず日本における中世研究のために中心的な研究センターを作り、その図書などの設備を研究者一般に対して提供するところにあった。設置に際して1955年度文部省科学研究費補助金(機関研究)が「主として写本・古写本のマイクロフィルムによる中世思想形成過程の研究」に対して与えられ、研究担当者である江藤教授がヴァチカン、ミュンヘン、パリ、オクスフォードなどから写本のマイクロフィルム多数を購入した。

本研究室は設立当初から中世哲学会と密接な関係を保ち、1973年まではほぼ14年間にわたって本学会の事務所としても機能していた。今日でも上智大学教職員・学生と並んで、中世哲学会の会員も研究所の図書を借出も含めて自由に利用でき、また本学会の会員でない場合も上智大学図書館友会員となった上で研究所の図書を閲覧することができる。

江藤教授のたゆまぬ努力の下で、教授の1974年の退官まで、本研究室は、当時の出版物から伺えるようにアウグスティヌスとトマス・アキナスを中心に、また江藤教授の専門でもあったラテン・アヴェロエス主義や中世後期の命題集註解に重点を置

きながら研究を進めてきた。1976年には本研究室はその活動範囲が広がり、また所員は哲学科の教員だけでなく史学科、神学部教員も含むようになったので、学長直属の「中世思想研究所」(Institute of Medieval Thought)に昇格された。それ以来1990年まで、中世に関する知識の普及また若い研究者の養成をめざして「中世思想セミナー」という名称の下に毎年上智大学全体で開講された中世関係の科目(古典語、哲学、神学、諸文学、芸術など)が他大学の教員と学生に向けて公開されるようになった。1984年に本研究所は上智大学新図書館8階に移り、中央図書館の中世関係叢書・蔵書や他の思想関係研究所の近くに置かれることとなった。

本研究所は所長に代表され、上智大学教員である所員が構成する所員会議によって運営されている。事務職員1名が臨時職員とともに事務、図書整理また編集補助業務を行っている。また本研究所は純粋な研究機関であるため、上智大学内の授業活動は担当しないが、所員がそれぞれの学科に属して、そこで専任教員として教授活動に従事している。

## 2 目的と活動諸分野

本研究所はその規定により、「ヨーロッパ中世(教父時代を含む)思想の理解をキリスト教神学、哲学等あらゆる側面からの研究・教育により促進することを目的とする」。本研究所の時代的研究範囲は、古代キリスト教(2世紀)の初期教父からギリシアまたラテンの教父時代、また中世全体にわたり、16・17世紀の初期近世スコラ学にまで及ぶ。その際、中世に関しては地理的重点が西方ラテン世界に置かれているが、東方ビザンツ世界も含まれ、また中世のイスラーム哲学とユダヤ思想も、特にそれがラテン中世に影響を及ぼした限りで本研究所の図書と出版物において広く考慮されている。内容に関しては、本研究所の元々の設立意図に従って、教父時代と中世の哲学・神学を中心とするが、教会史の諸側面、特にキリスト教霊性史も次第に重大な活動分野になってきた。

本研究所の所員は、中世思想史を国際的水準で十分に研究できる専門図書室を築き上げるとともに、研究と出版物を通して日本におけるヨーロッパ中世に関する知識と理解の向上に寄与することを主な課題とする。この二重の活動分野の他、研究所は時に応じて講演会、シンポジウム、セミナーを国内・国外の専門家を囲んで開催することもある。また今年すでに半世紀の活動を振り返ることになった隔週開催の「トマス会」は、長年にわたって上智大学名誉教授・前所員のF.ペレス先生の指導の下でト

マス・アキナスの哲学・神学の研究に努め、また若い研究者・翻訳者の養成を図っている。本研究所またその所員は、中世思想関係のさまざまな国内外の学会での活動を通じて、日本における中世研究を推進しようとしている。

### 3 本研究所の図書室

現代における中世研究の急激な発展、今まで知られていなかった中世の著者の発見、新たな研究分野・問題提起・研究方法の開拓、またさまざまな分野の相互浸透に対して、個人の研究者にとっては自らの研究分野に必要な文献を揃えることもますます困難になっていると言えよう。それゆえ本研究所の図書室では教父時代・中世の思想史の原典と学術研究書をなるべく包括的に収集し、それを日本における中世研究者に提供することを自らの目的と考えている。そのみならず、本図書室は本研究所において企画された出版物の作成のための不可欠な基盤となっている。本図書室は現在3万冊弱の図書（原典の他に英・独・仏語などによる）を収めている。上智大学においては本研究所の図書が、中央図書館と石神井キャンパスに位置する神学部図書館の教父・中世関係図書によって補足される。研究所では現代の中世研究のさまざまな専門分野を反映する約60件の雑誌を定期的に購入している。また日本における中世研究に関しては、紀要・諸雑誌に掲載される論文の抜刷を著者のご好意により寄贈していただき、学生・研究者の閲覧に供している。本図書室では新刊書だけでなく最近の百年間に刊行された研究書・校訂版などもできる限り購入し、蔵書の充実を図っている。

基本的な辞典と文献目録を始め、本研究所は教父時代に関する文献と中世の哲学・神学・神秘思想に関して国内随一の蔵書を有しており、アウグスティヌス、エリウゲナ、アンセルムス、トマス・アキナス、スコトゥス、オッカム、エックハルトやクザーヌなどの中心的な思想家についての多数の研究書と並んで、最近まで必ずしも注目されなかった多くの著者についても原典と参考文献を揃えようとしている。また最近の研究動向に従って、ルネサンスをも、イタリアにおける基盤と北方への拡大に関して視野に入れ、蔵書を拡大しようとしている。哲学・神学・神秘思想の他、中世文学（羅・独・英・仏・伊など）、また芸術史、音楽史、さらに中世史一般の基本的著作、中世の社会史、文化史、また特に教会史の諸分野、その内でも典礼史、靈性史、異端史、教会法史、教皇史、公会議史、そして特に諸修道会の歴史、聖人伝などにも重点を置き、中世の教育史、大学史、政治・経済・法律思想とともに中世の自然

学の諸側面をも図書購入範囲に入れている。

#### 4 研究と刊行物

本研究所では学術書の企画・編集などを通して中世における西欧の精神史を研究者に対してのみならず一般知識人に対しても開示することを重大な課題と考えている。中世思想は、一方では古代の哲学と聖書における信仰の解釈と創造的発展として現れるが、他方では近世思想の起源として、近代思想の多くのモチーフを発展的に始めて理解可能にするものとして研究される。しかしこのような思想史的関心をも超えて、中世思想は、現代の研究においてそれに固有な価値と真理に関して解明され、現代の思想的対話においてますます一つの不可欠な声としての役割を演じるようになっていく。本研究所はその研究と出版活動においてこれらの中世研究の諸側面を現代の思想界において活性化させるように努めている。以下に1980年以降の本研究所の刊行物を挙げる。

本研究所の所員の共同研究による学術的成果は全国の研究者の協力をも得て「中世研究」という紀要をも兼ねる叢書として毎年公刊される。現在までに出版された巻は、創刊号『聖ベネディクトゥスと修道院文化』、第2号『キリスト教的プラトン主義』、第3号『中世の歴史観と歴史記述』、第4号『中世における古代の伝統』、第5号『中世の人間像』、第6号『古代の自然観』、第7号『中世の自然観』、第8号『中世の修道制』、第9号『中世の学問観』、第10号『中世の社会思想』である。

「中世研究叢書」には、一人の著者（必ずしも所員に限らない）による中世に関する独立した研究が収められる。これまでに K. リーゼンフーバー『中世における自由と超越』（1988年）、『中世哲学の源流』（1995年）、R. L. シロニス『エリウゲナの思想と中世の新プラトン主義』（1992年）が刊行された。

翻訳書の『キリスト教史』（全11巻 1980～82/新装版90～91年）はキリスト教史をその起源から現在まで包括的に取り扱うものであり、本年から新書版として再版の予定である。

国内研究者による約90編の書き下ろし論文から成る『教育思想史』（全6巻1984～86年 絶版）では、ギリシア・ローマ（第1巻）、聖書と教父時代（第2巻）、中世（第3・4巻）、イタリア・ルネサンス（第5巻）、北方ルネサンス（第6巻）の重要な思想家や思潮の教育思想が展開されている。

さらに英語原書からの翻訳『図説キリスト教文化史』（全3巻1993～94年）はキリ

スト教の歴史を社会・文化・芸術史という観点の下で古代におけるその起源から今世紀まで辿る。

仏語原書から翻訳された『キリスト教神秘思想史』(全3巻 既刊第1巻1996年～)は古代・ビザンツ・ロシア(第1巻)、中世(第2巻)、スペインとフランスを中心とした近代(第3巻)におけるキリスト教の靈性史を主題とし、特に教父時代と中世に関してはキリスト教思想史・文学史の役割をも兼ねている。

本研究所のこの数年にわたって最も中心的な活動になっている『中世思想原典集成』(全20巻 既刊11巻 1992年～)は、教父時代と中世の哲学・神学・神秘思想などの重大な原典を約340の著作の翻訳に簡潔な解説と訳註を付して紹介するものである。本叢書は、翻訳また監修に際して示された、中世哲学会の多くの研究者の寛大なご尽力、ご好意に支えられて始めて可能になったものであり、この場を借りて深く感謝の意を表したい。本叢書に収録されている著作のうち少なからぬものが始めて現代語に翻訳されるものであり、これらの翻訳を通して1500年の思想史の流れの全貌を原典にもとづいて理解することができるようになる。各巻はある時代や学派を完結した形で取り扱い、また各巻になるべく一人の中心的な著者が取り上げられるとともに、各巻の諸著作全体で、テーマに関しても、著者の選択に関しても相互補助的な形でその時代や学派の特徴を表そうとしている。同時に全巻にわたって、いくつかの根本的モチーフ(たとえば創造論、三位一体論、知性論、神秘思想、修道会史など)をその概念史、発展史的流れに沿って研究できる材料が収められている。現在、大きな著作をも収録するいくつかの別巻を企画中である。

なお、中世思想と文化に関する欧文の学術書の翻訳の刊行をも今後積極的に企画する予定であり、上記の諸叢書とともに、この企画に関しても本研究所は中世哲学会の研究者のご提案とご協力を仰ぐ次第である。 (K. リーゼンフーバー)

---

## 京大中世哲学研究会——紹介と現状

京大中世哲学研究会は1980年の秋に、当時京都大学文学部で西洋中世哲学史講座を担当されていた山田晶先生の肝いりで、同講座に所属する院生や卒業生の研究発表